秦焚書觀の變遷

西山尚志

はじめに

言うまでもなく、秦の始皇帝による焚書は、中國古代の歴史・思想・文獻・制度などを語る上で避けて通れない、極めて重要な歴史事件である。この秦焚書は古今多くの論著で言及されてきたが、主な論點は焚書の實態あるいは各文獻の流傳經緯に關するものであった。(一)その一方で、秦焚書に對する認識・解釋（秦焚書觀）がどのように變化したのかという視點は、今まであまり意識されて來なかった。

本稿の結論から言えば、賈誼（『新書』・『過秦』）や司馬遷『史記』といった「最古層の史料」と比べると、前漢末期頃から秦焚書の說明に變化が現れる。秦焚書と『書』・『禮』との關聯については、最古層の史料でもすでに詳細に說明しており、後漢以降も引き續きこの說明をほぼ踏襲する。しかし、秦焚書と『易』・『詩』・『樂』・『春秋』・『孝經』・諸子との關聯については、前漢末期以降から新たな說明・解釋が登場し、場合によってはそれ以前の說明と矛盾するようになった。そして、前漢末期以降に登場したこれらの「新たな秦焚書觀」は、魏晉南北朝期には主流な考えとなっていく。本稿はこのような秦焚書觀の推移・變遷に着目し、その解明に努めるものである。

第一節　最古層の史料に見える秦焚書觀

前漢の文獻における秦焚書の記述は、賈誼（『新書』・『過秦』）・司馬遷『史記』のみに見え、これらが秦焚書の最古層の史料と言える。『史記』秦始皇本紀の秦始皇三十四年には、丞相李斯による次のような焚書政策の建議が見える（『史記』李斯列傳にもほぼ同樣の文章が見える）。最古層の史料では、この文が最も具體的に秦焚書の內容を說明している。

丞相李斯曰、「今皇帝幷有天下、別黑白而定一尊。……臣請史官非秦記皆燒之。非博士官所職、天下敢有藏『詩』・『書』・百家語者、悉詣守尉雜燒之。有敢偶語『詩』『書』者弃市。……令下三十日不燒、黥爲城旦。所不去者醫藥・卜筮・種樹之書。若欲有學法令、以吏爲師。」

丞相李斯曰く、「今皇帝は天下を幷わせ有ち、黑白を別ちて一尊を定む。……臣請う史官の秦記に非ざるものは皆これを燒く。博士官の職る所に非ずして、天下敢えて『詩』・『書』・百家の語を

藏する者有らば、悉く守・尉に詣して雜えてこれを燒く。敢えて『詩』『書』を偶語する者あらば弃市す。……令下り三十日にして燒かざれば、黥して城旦と爲す。去らざる所の者は醫藥・卜筮・種樹の書なり。若し法令を學ぶこと有らんと欲すれば、吏を以て師と爲さん」と。

この文章を整理すると、秦焚書で對象・對象外となった書物の狀況は以下の通りである。

①秦の歷史書でなければ全て燒いた（史官非秦記皆燒之）。

②博士官の管理下でない『詩』・『書』や百家の語（諸子）は燒いた（非博士官所職、天下敢有藏『詩』・『書』・百家語者、悉詣守・尉雜燒之）。

③焚書の對象外となったのは、醫學書・卜筮書・農業書である（所不去者、醫藥・卜筮・種樹之書）。

最古層の史料中で燒かれたとされる書物は以上の『詩』・『書』・百家の語あるいは「秦記以外の歷史書」だけでなく、『史記』儒林列傳には、

諸學者多言『禮』、而魯高堂生最本。『禮』固自孔子時而其經不具、及至秦焚書、書散亡益多、於今獨有『士禮』、高堂生能言之。

諸學者多く『禮』を言う、而れども魯の高堂生最も本たり。『禮』固より孔子の時より其の經具わらず、秦の焚書に至るに及び、書の散亡益多く、今に於いては獨り『士禮』有るのみ、高堂生能くこれを言う。

とあり、『禮』は孔子の時代にはすでに不完全なものとなっていたが、秦焚書により散逸し、『士禮』のみが殘った、と記している(④)。

最古層の史料における秦焚書の內容で上擧した①～④の範圍を逸脫するものはない。賈誼『新書』過秦上篇には（『史記』秦始皇本紀所引賈誼の言と『史記』陳涉世家所引賈誼『過秦』にもほぼ同じ文章が見える）、

及至始皇、……於是廢先王之道、焚百家之言、以愚黔首。

始皇に至るに及び、……ここに於いて先王の道を廢し、百家の言を焚き、以て黔首を愚にす。

とあり、焚書の對象は「百家之言」となっており、②に屬す。賈誼『新書』過秦下篇には（『史記』秦始皇本紀所引賈誼の言にもほぼ同じ文章が見える）、

秦王懷貪鄙之心、……廢王道而立私愛、焚文書而酷刑法、……。(一)

秦王貪鄙の心を懷き、……王道を廢して私愛を立て、文書を焚きて刑法を酷にし、……。

とある。この文章は具體的な書名は擧げていないが、この「焚文書」は一種の「秦焚書の總稱」と言える（以下、秦焚書において對象となった書名を具體的に擧げずに、ただ概說している場合を「秦焚書の總稱」と呼ぶこととする）。その他、『史記』六國年表には、

秦既得意、燒天下『詩』『書』、諸侯史記尤甚、爲其有所刺譏也。

『詩』『書』所以復見者、多藏人家、而史記獨藏周室、以故滅。惜哉、惜哉。獨有秦記、又不載日月、其文略不具。

秦既に意を得、天下の『詩』『書』を燒き、諸侯の史記尤も甚しきは、其の刺譏する所有るが爲なり。『詩』『書』のまた見るる所以の者は、多くは人家に藏せらるればなり、而れども史記は獨り周室に藏せらるるのみ、故を以て滅ぶ。惜しきかな、惜しきかな。獨り秦記あるのみ、また日月を載せず、其の文ほぼ具わらず。

とあり、『詩』・『書』と「秦記以外の歷史書」を對象にしており、①と②に屬す。また、『史記』封禪書には、

諸儒生疾秦焚『詩』『書』、誅偸文學、百姓怨其法、……。
諸儒生 秦の『詩』『書』を焚き、文學を誅偸するを疾(にく)み、百姓其の法を怨み、……。

とある。また『史記』淮南衡山列傳は、

昔秦絶聖人之道、殺術士、燔『詩』『書』、弃禮義、……。
昔秦 聖人の道を絶ち、術士を殺し、『詩』『書』を燔き、禮義を弃て、……。

とある。『史記』儒林列傳には、

及至秦之季世、焚『詩』『書』、阬術士、六藝從此缺焉。
秦の季世に至るに及び、『詩』『書』を焚き、術士を阬(あなうめ)にし、六藝これ從り缺く。

とあり、秦焚書によって「六藝」が缺けたと説明している。同じく『史記』儒林列傳には、

伏生者、濟南人也。故爲秦博士。孝文帝時、欲求能治『尚書』者、天下無有。……秦時焚書、伏生壁藏之。其後兵大起、流亡。漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇。卽以敎于齊魯之閒。
伏生は、濟南の人なり。故(もと)秦の博士たり。孝文帝の時、能く『尚書』を治むる者を求めんと欲するも、天下に有る無し。……秦の時に焚書あり、伏生これを壁藏す。其の後兵大いに起り、流亡す。漢定まり、伏生其の書を求むるも、數十篇を亡い、獨り二十九篇を得るのみ。卽ち以て齊魯の閒に敎う。

とあり、焚書の際に伏生が『尚書』を壁に隱した經緯が記されており、②の範圍内である。また『史記』太史公自序では、

周道廢、秦撥去古文、焚滅『詩』『書』、……。
周道廢れ、秦古文を撥(のぞ)き去り、『詩』『書』を焚滅す、……。

とある。

では、ここで最古層の「秦焚書觀」を整理してみよう。焚書の對象となった書物は、文面だけ見れば、『詩』・『書』・『禮』・諸子・「秦記以外の歷史書」である。『書』と『禮』については、焚書の際における具體的な流傳經緯も記述されている(『史記』儒林列傳中の伏生・高堂生)。しかし、當然これらの書物だけが焚書の對象となったわけではない。

最古層の史料では「『詩』『書』を燒く」という表現が突出して多い(「焚『詩』『書』」「焚滅『詩』『書』」「燔『詩』『書』」など)。これは『詩』と『書』だけを指しているというよりも、『詩』と『書』を代表として焚書の總稱としているのだろう。

秦焚書の記述は、賈誼(『新書』・『過秦』)・司馬遷『史記』に見えるのが最古層のものであり、これを出發點とすると、前漢末期以降から秦焚書と各文獻との關聯説明に變化が生じていることがわかる。次節は前漢末期以降の秦焚書觀を調査する。

第二節　前漢末期以降の秦焚書觀

(一) 秦焚書を總稱する場合

ここでは、最古層の史料以降では秦焚書の總稱をどのように表現しているのかを調査する。秦焚書の總稱は多くの文獻に見えるため、調査の範圍を後漢までに限定する。最古層の史料では、秦焚書の總稱は主に「『詩』『書』を燒く」という表現を用いていた。この表現は前漢末期以降にも引き續き見られ、『戰國策』劉向書錄に、「遂燔燒『詩』『書』、坑殺儒士、……」とあり、『漢書』五行志下に、「史記秦始皇帝二十六年、……燔『詩』『書』、阬儒士」とあり、『漢書』王莽傳中の

班固の贊に、「昔秦燔『詩』『書』、以立私議、……」などがあり、この他にも多く見られる。[三]

後漢になると、「『詩』『書』を燒く」という表現を「五經を燒く」とほぼ同じ意味で使う例も見られる。例えば『論衡』語增篇に、

傳語曰、「秦始皇帝燔燒『詩』『書』、坑殺儒士。」言燔燒『詩』『書』、滅去五經文書也。坑殺儒士者、言其皆挾經傳文書之人也。燒其書、坑其人、『詩』『書』絕矣。……。

傳語に曰く、「秦の始皇帝『詩』『書』を燔燒し、儒士を坑殺す」と。『詩』『書』を燔燒すと言うは、五經文書を滅去するなり。儒士を坑殺するは、其のみな經傳文書を挾むの人を言うなり。其の書を燒き、其の人を坑にして、『詩』『書』絕ゆ。……。

とあり、『論衡』正說篇に、

說『尙書』者、或以爲本百兩篇、後遭秦燔『詩』『書』、遺在者二十九篇。夫言秦燔『詩』『書』、是也。言本百兩篇者、妄也。蓋『尙書』本百篇、孔子以授也。遭秦用李斯之議燔燒五經、濟南伏生抱百篇藏於山中。

『尙書』を說く者、或るひと以爲く本百兩篇あり、後に秦の『詩』『書』を燔くに遭い、遺り在るは二十九篇たり。夫れ秦の『詩』『書』を燔くと言うは、是なり。本百兩篇と言うは、妄なり。蓋し『尙書』本百篇なるは、孔子以て授けしものなり。秦の李斯の議を用いて五經を燔燒するに遭い、濟南の伏生は百篇を抱き山中に藏す。

とある。なお、この「五經を燒く」という表現は『論衡』中に多く見られる。一部だけ擧げると、『論衡』謝短篇には、

秦燔五經、坑殺儒士、五經之家所共聞也。秦何起而燔五經、何感而坑儒生〈士〉。[四]

秦の五經を燔き、儒士を坑殺するは、五經の家の共に聞く所なり。秦は何を起して五經を燔き、何を感（憾）みて儒生〈士〉を坑にするか。

とあり、『論衡』佚文篇に、

始皇前歎韓非之書、後惑李斯之議、燔五經之文、設挾書之律。五經之儒、抱經隱匿、伏生之徒、竄藏土中。

始皇前に韓非の書を歎え、後に李斯の議に惑い、五經の文を燔き、挾書の律を設く。五經の儒、經を抱き隱匿し、伏生の徒、土中に竄し藏す。

などとある。この他に「經書を燒く」という表現は、『漢書』楚元王傳（劉歆の條）の「移太常博士書」に、「燔經書、殺儒士、……」とあり、『說文解字』序に、「是時秦燒滅經書、……」とある。この他、『孟子』趙岐題辭に、「逮至亡秦、焚滅經術、……」とある。

この他、後漢以降では「書を燒く」という表現も焚書を總稱する場合によく用いられている。[五]

最古層の史料から劉歆・『漢書』・『論衡』までの間は、儒教の國教化整備が進められた時期に當たる。「五經」・「經書」・「經術」を燒くという表現が後漢以降に初めて登場するのは、儒教が國教化されて儒家經典に對する焚書の被害意識が高まったためであろう。[六]

次節は、前漢末期以降における秦焚書と各文獻との關聯說明を調査し、秦焚書觀の變遷を考察する。

（二）秦焚書と『易』

前漢末期以降で秦焚書に言及する場合は、上述した秦焚書の總稱の例を除くと、その對象は經と諸子に限られている。以下はそれらを一

つずつ檢討する。調査の範圍は六朝末期までとし、唐初の史料は參考程度に留める。まずは『易』から見てみよう。『漢書』藝文志『易』類には、

及秦燔書、而『易』爲筮卜之事、傳者不絕。漢興、田和（何）傳之。

秦書を燔くに及ぶ、而れども『易』は筮卜の事爲れば、傳うる者絕えず。漢興り、田和（何）これを傳う。

とあり、『易』は占いの書物であるために燒かれなかったと說明している。これはすでに擧げた『史記』秦始皇本紀の「所不去者、醫藥・卜筮・種樹之書」を基礎にした說明である。この他、『漢書』楚元王傳（劉歆の條）の「移太常博士書」に、

陵夷至于暴秦、燔經書、殺儒士、設挾書之法、……。漢興、……天下唯有『易』卜、未有它書。

陵夷して暴秦に至り、經書を燔き、儒士を殺し、挾書の法を設け、……。漢興り、……天下唯だ『易』卜有るのみ、未だ它書有らざるなり。

とあり、荀悅『漢紀』孝成皇帝紀二卷に見える劉向の言に（『太平御覽』卷第五百七所引皇甫謐『高士傳』（田何の條）にもほぼ同じ文が見える）、

……及秦焚『詩』『書』、以『易』爲卜筮之書、獨不焚。漢興、田何以易授民。……。

……秦『詩』『書』を焚くに及び、『易』を以て卜筮の書と爲し、獨り焚かず。漢興り、田何易を以て民に授く。……。

とある。『漢書』藝文志は劉向『別錄』・劉歆『七略』を基礎に編纂されているが、上擧した『漢書』藝文志『易』類の文も劉向・劉歆の考えに基づいていると言える。その他、『論衡』謝短篇に、

問之曰、「……秦燔五經、『易』何以得脫。……」

これに問いて曰く、「……秦五經を燔くに、『易』何を以て脫するを得るか。……」と。

とあるが、この問いは明らかに『易』は焚書の難を逃れたという話を前提としている。

このように、劉向・劉歆以來の「『易』は焚書の對象外だった」という說はその後もそのまま繼承されている。

（三）秦焚書と『書』

秦焚書と『書』については、『新書』や『史記』に「『詩』『書』を燒く」という記述があり、より具體的な經緯はすでに擧げた『史記』儒林列傳の伏生壁藏書の話に見える。『史記』六國年表には「『詩』『書』所以復見者、多藏人家」という說明が見えるが、これは『史記』儒林列傳の話と大きく衝突していない。

後漢以降にも秦焚書と『書』について說明した文は多く見られる。『漢書』藝文志『尙書』類には、

……秦燔書禁學、濟南伏生獨壁藏之。漢興、亡失求得二十九篇、以敎齊魯之閒。……古文『尙書』者、出孔子壁中。武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文『尙書』及『禮記』・『論語』・『孝經』凡數十篇、皆古字也。……。

……秦書を燔き學を禁じ、濟南の伏生獨りこれを壁藏す。漢興り、亡失せるを求めて二十九篇を得、以て齊魯の閒に敎う。……古文『尙書』は、孔子の壁中より出ず。武帝の末、魯の共王 孔子の宅を壞し、以て其の宮を廣げんと欲し、而して古文の『尙書』及び『禮記』・『論語』・『孝經』凡そ數十篇を得、皆古字なり。……。

とある。また、『論衡』謝短篇には、

問尚書家曰、「……秦焚諸〈『詩』〉『書』之時、『尚書』諸篇皆何在。……」

尚書家に問いて曰わん、「……秦諸〈『詩』〉『書』を焚くの時、『尚書』の諸篇みな何にか在る。……」と。

とあるが、この質問は『尚書』が焚書の對象であったことを前提としている。またすでに本節（一）で擧げた通り、『論衡』の佚文篇と正説篇にも伏生が『書』を隱した話が見える。その他には、『論衡』書解篇に、

今五經遭亡秦之奢侈、觸李斯之横議、燔燒・禁防、伏生之休〈徒〉、抱經深藏。

今五經は亡秦の奢侈に遭い、李斯の横議に觸れ、燔燒・禁防せられ、伏生の休〈徒〉、經を抱き深く藏す。

とあり、『前漢紀』孝成皇帝紀二卷中の劉向の言に、

……『尚書』本自濟南伏生、爲秦博士。及秦焚書、乃壁藏其書。漢興、伏生求其書、亡數十篇、得二十九篇。……

……『尚書』は濟南の伏生より本まり、秦の博士たり。秦の焚書に及び、乃ち其の書を壁藏す。漢興り、伏生其の書を求め、亡ぶるもの數十篇、二十九篇を得。……

とある。その他、『孔子家語』後序に秦焚書と古文『尚書』の話が見え、

子襄以好經書博學、畏秦法峻急、乃壁藏其『家語』・『孝經』・『尚書』及『論語』於夫子之舊堂壁中。

子襄は經書を好み博學なるを以て、秦法の峻急なるを畏れ、乃ち其の『家語』・『孝經』・『尚書』及び『論語』を夫子の舊堂壁中に壁藏す。

とある。『孔子家語』後序の孔壁書發見の話は、『漢書』藝文志『書』類にも類似の内容が見える。ただし、『孔子家語』後序では孔壁書は秦焚書を避けるために子襄が隱したものとしているのに對し、『漢書』藝文志では秦焚書と壁中書に因果關係がない。つまり、『漢書』藝文志では孔壁書が隱されていた理由は秦焚書を避けるためであるとは全く考えていないのである。[七] また、孔壁書發見の話は多くの文獻に見えるが、いずれも秦焚書とは關係がない。よって、この『孔子家語』後序の内容は例外的と言える。

このように、秦焚書と『書』の關係は、『孔子家語』後序の例を除けば、最古層の史料と後漢以降の記述は基本的には一致している。

（四）秦焚書と『詩』

上述した通り、最古層の史料からすでに「『詩』『書』を燒く」という表現が散見している。それが秦焚書の總稱であったとしても、焚書の對象に『詩』が含まれていると考えられていたのは間違いない。また上述した通り、『史記』六國年表に「『詩』『書』所以復見者、多藏人家」とあり、『詩』が傳わった理由が説明されている。しかし後漢以降には、これとは異なった『詩』の流傳經緯の説明が現れる。『漢書』藝文志『詩』類には、

孔子純取周詩、上采殷、下取魯、凡三百五篇、遭秦而全者、以其諷誦、不獨在竹帛故也。

孔子純ら周詩を取り、上は殷を采り、下は魯を取り、凡そ三百五篇、秦に遭いて全くするは、其の諷誦し、獨り竹帛に在るのみならざるを以ての故なり。

とあり、『詩』が完全に殘ったのは、諷誦によって傳えられ、竹帛だ

けに殘されたわけではないからだと述べている。これは『詩』が燒かれたとする前漢以來の說を受けつつ、より具體的に流傳經緯の說明を行っている。その他、『論衡』正說篇では、

或言、秦燔詩書者、燔『詩經』之書也、其經不燔焉。夫『詩經』獨燔其詩。書、五經之總名也。……傳者不知秦燔書所起、故不審燔書之實。……乃令史官盡燒五經、有敢藏諸〈『詩』〉・『書』・百家語者刑、唯博士官乃得有之。五經皆燔、非獨諸〈『詩』〉家之書也。傳者信之、見言「詩書」、則獨謂『〈詩〉經』之書矣。

或るひと言う、秦詩書を燔くとは、『詩經』の書を燔くなり、其の經は燔かず、と。夫れ『詩經』獨り其の詩を燔かるるのみ。書は、五經の總名なり。……傳うる者は秦の燔書の起こる所を知らず、故に燔書の實に審らかならず。……乃ち史官をして盡く五經を燒かしめ、敢えて諸〈『詩』〉・『書』・百家の語を藏する者あらば刑し、唯だ博士官のみ乃ちこれを有するを得。五經みな燔き、獨り諸〈『詩』〉家の書のみならざるなり。傳うる者これを信じ、「詩書」を言うを見れば、則ち獨り『〈詩〉經』の書と謂うのみなり。

とあり、「秦燔詩書」を「『詩經』を解說する書を燒いたのであって、その經を燒いたわけではない」と解釋する者がいることを擧げ、それに反對して「五經はみな燒かれたのであって、『詩』家の書だけが燒かれたのではない」と說明している。また『論衡』謝短篇に、

問詩家曰、「……二王之末皆衰、夏・殷衰時、『詩』何不作。『尙書』曰、「詩言志、歌詠言。」此時已有詩也。斷取周以來、而謂興於周。古者采詩、詩有文也。今『詩』無書、何知非秦燔五經、『詩』獨無餘禮〈札〉也。」

詩家に問いて曰わん、「……二王の末みな衰え、夏・殷衰うる時、『詩』何ぞ作られざるや。『尙書』に曰く、「詩は志を言う、歌は言を詠う」と。この時すでに詩あるなり。周以來を斷取し、而して周に興ると謂う。古者詩を采るに、詩に文あるなり。今『詩』に書なく、何ぞ秦五經を燔くに、『詩』獨り餘禮〈札〉なきにあらざるを知らんや」と。

とあり、『詩』も焚書の對象とされていたとしている。

このように、焚書と『詩』の關係については、後漢以降は基本的に前漢以來の「詩書を燒く」という考えを繼承しているが、『史記』六國年表の「『詩』『書』所以復見者、多藏人家」という話は繼承されなかった。そして、『漢書』藝文志『詩』類の說明は、前漢以來の說明と衝突しないよう整合性を加えているようにも見える。また『論衡』正說篇には、「燔『詩經』之書也、其經不燔焉」と解釋する者がいたことが記されている。『漢書』と『論衡』はほぼ同時期に成立した文獻であるが、この時期には秦焚書と『詩』との關聯說明に若干の搖れがあったことが見て取れる。

(五) 秦焚書と『禮』

秦焚書と『禮』について、最古層の史料には、すでに擧げた通り『史記』儒林列傳に、「『禮』固自孔子時而其經不具、及至秦焚書、書散亡益多、於今獨有『士禮』、高堂生能言之」とある。『漢書』藝文志『禮』類でもほぼ同文を擧げており、

及周之衰、諸侯將踰法度、惡其害己、皆滅去其籍、自孔子時而不具、至秦大壞。漢興、魯高堂生傳『士禮』十七篇。……

周の衰うるに及び、諸侯將に法度を踰えんとし、其の己を害するを惡み、みな其の籍を滅去し、孔子の時より具わらず、秦に至り

大壞す。漢興り、魯の高堂生『士禮』十七篇を傳う。……

とある。また、『論衡』謝短篇には、

問禮家曰、「……見在十六篇、秦火之餘也。更秦之時、篇凡有幾。」禮家に問いて曰わん、「……見在の十六篇は、秦火の餘なり。秦更まりし時、篇凡そ幾かある」と。

とある。『論衡』謝短篇と『漢書』藝文志は篇數などの違いがあるものの、兩書とも基本的には『史記』の説明を踏襲していると言える。

（六）秦焚書と『樂』

秦によって「樂」（あるいは書物としての『樂』）が滅んだとする説は後漢末になって初めて見え、應劭『風俗通義』聲音篇に、

……其後、周室陵遲、禮崩樂壞、諸侯恣行、競悅所習、桑閒・濮上・鄭・衞・宋・趙之聲彌以放遠、滔湮心耳、乃忘和平、亂政傷民、致疾損壽。重遭暴秦、遂以闕忘（亡）。漢興、制氏世掌大樂、頗能紀其鏗鏘、而不能說其義。

……其の後、周室陵遲し、禮崩れ樂壞れ、諸侯恣に行い、競って習ふ所を悅び、桑閒・濮上・鄭・衞・宋・趙の聲彌以て放遠し、心と耳を滔かし湮め、乃ち和平を忘れ、政を亂して民を傷ない、疾を致して壽を損う。重ねて暴秦に遭い、遂に以て闕忘（亡）す。漢興り、制氏世に大樂を掌り、頗る能く其の鏗鏘を紀す、而れども其の義を說くこと能わず。

とある。[二] しかし、「樂」と秦焚書の關係を示す記述は初めからあったわけではない。『史記』樂書には、

治道虧缺而鄭音興起、封君世辟、名顯鄰州、爭以相高。……陵遲以至六國、流沔沈佚、遂往不返、卒於喪身滅宗、幷國於秦。秦二世尤以爲娛。丞相李斯進諫曰、「放弃『詩』『書』、極意聲色、祖伊所以懼也。輕積細過、恣心長夜、紂所以亡也。」趙高曰、「五帝・三王樂各殊名、示不相襲。上自朝廷、下至人民、得以接歡喜、合殷勤。非此和說不通、解澤不流、亦各一世之化、度時之樂、何必華山之騄耳而後行遠乎。」二世然之。

治道虧缺して鄭音興起し、封君世辟、名を鄰州に顯かにせんとして、爭いて以て相高む。……陵遲して以て六國に至り、流沔沈佚し、遂に往きて返らず、卒に身を喪い宗を滅ぼし、國を秦に幷わせらる。秦二世尤も以て娛を爲す。丞相李斯進み諫めて曰く、「『詩』『書』を放弃し、意を聲色に極むるは、祖伊の懼るる所以なり。細き過ちを積むことを輕んじ、心を長夜に恣にするは、紂の亡ぶる所以なり」と。趙高曰く、「五帝・三王の樂各名を殊にし、相い襲わざるを示す。上は朝廷より、下は人民に至るまで、以て歡喜に接わり、殷勤に合するを得。これに非ざれば和說通ぜず、解澤流れず、また各一世の化、度時の樂あり、何ぞ必ずしも華山の騄耳ありて後に遠きに行かんや」と。二世これを然りとす。

とある。もし秦焚書が「樂」にまで及んでいると司馬遷が認識していたのなら、ここに秦焚書のことが記されていてもおかしくない。しかし、この文は上古から漢に至るまでの「樂」の傳承を詳細に記しているものの、秦焚書のことには一切觸れていない。更に、この文には秦焚書を主導した李斯の發言が見えるが、『樂』を燒くなどと一切述べていない。李斯の發言は「樂」のマイナス面を說いたものであるが、「樂」のプラスの效用を說く趙高に秦二世皇帝の前で論駁されてしまっており、秦焚書が「樂」に適用されていたとは考えられない。よって、『史記』では秦焚書が原因で「樂」（あるいは『樂』）が滅んだと認

識していなかったと言えよう。この點は『漢書』も同じである。『漢書』禮樂志に、

……是時、周室大壞、諸侯恣行、設兩觀、乘大路。陪臣管仲・季氏之屬、三歸雍徹、八佾舞廷。制度遂壞、陵夷而不反、桑閒・濮上・鄭・衞・宋・趙之聲竝出、內則致疾損壽、外則亂政傷民。……至於六國、魏文侯最爲好古、而謂子夏曰、「寡人聽古樂則欲寐、及聞鄭・衞、余不知倦焉。」子夏辭而辨之、終不見納、自此禮樂喪矣。漢興、樂家有制氏、以雅樂聲律世世在大樂官、但能紀其鏗鎗鼓舞、而不能言其義。

……この時、周室大壞し、諸侯恣に行い、兩觀を設け、大路に乘る。陪臣管仲・季氏の屬、三歸ありて雍もて徹し、八佾を廷に舞わしむ。制度遂に壞れ、陵夷して反らず、桑閒・濮上・鄭・衞・宋・趙の聲竝び出で、內は則ち疾を致して壽を損い、外は則ち政を亂し民を傷う。……六國に至り、魏の文侯最も古を好みたり、而れども子夏に謂いて曰く、「寡人古樂を聽かば則ち寐んと欲す、鄭・衞を聞くに及び、余 倦むを知らず」と。子夏辭してこれを辨ずるも、終に納れられず、これより禮樂喪ぶ。漢興り、樂家に制氏有り、雅樂聲律を以て世世大樂官に在り、但だ能く其の鏗鎗鼓舞を紀すのみにして、其の義を言うこと能わず。

とあり、『漢書』藝文志・六藝略『樂』類に、

……周衰俱壞、樂尤微眇、以音律爲節、又爲鄭衞所亂、故無遺法。漢興、制氏以雅樂聲律世在樂官、頗能紀其鏗鏘鼓舞、而不能言其義。……周衰え俱に壞れ、樂は尤も微眇にして、音律を以て節と爲し、また鄭・衞の亂す所となる、故に遺法無し。漢興り、制氏は雅樂聲律を以て世(よよ)樂官に在り、頗る能く其の鏗鏘鼓舞を紀せども、其の義を言うこと能わず。

とある。このように、『漢書』の禮樂志も藝文志も、「樂」の衰退の理由は鄭や衞などの亂れた音樂の隆盛にあるとしており、「樂」(あるいは『樂』)は秦焚書とは關係なく衰退・散逸したと認識していた。また『漢紀』孝成皇帝紀二卷所引の劉向の說に、

『樂』、自漢興、制氏以知雅樂聲律世在樂官、但紀鏗鏘鼓舞而已、不能言其義。

『樂』は、漢より興り、制氏雅樂聲律を知るを以て世樂官に在り、但だ鏗鏘鼓舞を紀すのみにして、其の義を言うこと能わず。

とあるが、ここでも『樂』と秦焚書の關係は見いだせない。このように、『史記』・『漢書』・『漢紀』所引劉向說は「樂」の傳承經緯を詳細に記述しているにもかかわらず、「樂」と秦焚書を全く關聯づけていないのである。

さて、先に『風俗通義』の文を擧げたが、これは明らかに『漢書』禮樂志・藝文志の文を下敷きにしたものである。そもそも應劭は『漢書集解音義』を撰しており(二)、『漢書』に精通していた。しかし、『風俗通義』には『漢書』にはない「重遭暴秦、遂以闕忘」という一文が加わっている。そして『風俗通義』以降は、「樂」(あるいは『樂』)は秦によって滅んだとする說が主流となる。梁の劉勰『文心雕龍』樂府篇に、

自雅聲浸微、溺音騰沸。秦燔『樂經』、漢初紹復、制氏紀其鏗鏘、……

雅聲浸微してより、溺音騰沸す。秦『樂經』を燔き、漢初に紹復し、制氏其の鏗鏘を紀し、……

とあり、北齊の魏收『魏書』樂志には、

……晉平公聞清角而顚隕、魏文侯聽古雅而眠睡、鄭・宋・齊・衞、流宕不反、於是正樂虧矣。……樂之崩矣、秦始滅學、經亡義絶、莫探其眞。……漢興、制氏但識其鏗鏘鼓舞、不傳其義、……。……晉平公 清角を聞きて顚隕し、魏文侯 古雅を聽きて眠睡し、鄭・宋・齊・衞、流宕して反らず、是に於いて正樂虧く。……樂の崩るるや、秦始めて學を滅ぼし、經亡び義絶え、其の眞を探ることなし。……漢興り、制氏但だ其の鏗鏘鼓舞を識すのみにして、其の義を傳えず、……。

とあり、沈約撰『宋書』樂志には、

及秦焚典籍、『樂經』用亡。漢興、樂家有制氏、……。

秦典籍を焚くに及び、『樂經』用て亡ぶ。漢興り、樂家に制氏有り、……。

とある。『樂經』は秦焚書によって滅んだと沈約が考えていたことは、『隋書』音樂志上所引の沈約の說からも確認でき、

於是散騎常侍・尙書僕射沈約奏答曰、「竊以秦代滅學、『樂經』殘亡。……。」

是に於て散騎常侍・尙書僕射沈約奏答して曰く、「竊に以(おも)うに秦代學を滅ぼして、『樂經』殘亡す。……。」

とある。また一部の唐初の史料を擧げると、『晉書』音樂志上に、

秦氏幷吞、遂專刑憲、至於絃歌『詩』『頌』、干戚旄羽、投諸煙火、掃地無遺。

秦氏幷吞し、遂に刑憲を專らにし、絃歌『詩』『頌』、干戚旄羽に至るまで、諸を煙火に投じ、地を掃いて遺るものなし。

とあり、『隋書』經籍志の『樂』に、

其後衰微崩壞、及秦而頓滅。漢初、制氏雖紀其鏗鏘鼓儛、而不能通其義。

其の後衰微して崩壞し、秦に及びて頓滅す。漢初、制氏其の鏗鏘鼓儛を紀すと雖も、其の義に通ずること能わず。

とある。このように、「樂」（あるいは『樂』）が秦焚書によって衰退・散逸したという考えは、『史記』・『漢書』・『前漢紀』所引劉向說には全く見えなかったが、應劭『風俗通義』に初めて見えて以降はそれがほぼ定着した。

（七）秦焚書と『春秋』

秦焚書と『春秋』については、『春秋公羊傳』隱公二年の何休注に、

春秋有改周受命之制。孔子畏時遠害、又知秦將燔『詩』『書』、其說口授相傳。至漢、公羊氏及弟子胡毋生等乃始記於竹帛。

春秋に周を改め命を受くるの制あり。孔子時を畏れ害を遠ざけ、また秦の將に『詩』『書』を燔かんとするを知り、其の說口授にて相い傳う。漢に至り、公羊氏び弟子の胡毋生等乃ち始めて竹帛に記す。

とあり、孔子が將來の秦焚書を豫言して口傳したとしている。(一三) この何休の說明には讖緯說の影響が見て取れ、やはり前漢末期以降の考えに基づいていると言える。

（八）秦焚書と『孝經』

周知の通り、『孝經』には今文と古文がある。今文『孝經』と秦焚書の關係が初めて見えるのは、唐初の史料になるが『隋書』經籍志に（『經典釋文』序錄にもほぼ同じ文が見える）、

夫孝者、天之經、地之義、人之行。……遭秦焚書、爲河間人顔芝所藏。漢初、……又有古文『孝經』、與古文『尚書』同出、……。

夫れ孝は、天の經、地の義、人の行なり。……秦の焚書に遭い、河間の人顔芝の藏する所と爲る。漢初、……また古文『孝經』あり、古文『尚書』と同に出で、……。

とある。しかし、今文『孝經』と秦焚書を結びつける話はこれより早い時期の文獻には見られない。實はこの『隋書』經籍志や『經典釋文』序錄の文は、次の『漢書』藝文志の內容を基礎にしている。

『孝經』者、孔子爲曾子陳孝道也。夫孝、天之經、地之義、民之行也。舉大者言、故曰『孝經』。漢興、……各自名家。經文皆同、唯孔氏壁中古文爲異。

『孝經』は、孔子 曾子の爲に孝道を陳ぶるものなり。夫れ孝は、天の經、地の義、民の行なり。大なるものを擧げて言う、故に『孝經』と曰う。漢興り、……各自名家あり。經文皆同じ、唯だ孔氏壁中の古文は異と爲す。

比較してみるとよく分かる通り、『漢書』藝文志には秦焚書や顔芝藏書の話が見えない。よって『隋書』經籍志と『經典釋文』序錄に見える秦焚書と今文『孝經』の關聯は、『漢書』以降に作られたものと見てよいだろう。

一方、古文『孝經』と秦焚書の關係は、本節（三）ですでに擧げた通り『孔子家語』後序に見える。しかし、すでに述べた通り、秦焚書と孔壁書を關係づけているのは『孔子家語』後序のみであり、これは王肅の創作と考えるべきである。

（九）秦焚書と諸子

すでに述べた通り、最古層の史料では「百家語」（あるいは「百家之言」）が燒かれたと說明している。

その後も引き續き同じ說明が見られ、『漢書』陳勝項籍傳や『漢紀』高祖皇帝紀には「於是廢先王之道、焚百家之言」とある。しかし、これらはいずれも賈誼『過秦』からの引用である。また本節（四）ですでに擧げた『論衡』正說篇に、「……乃令史官盡燒五經、有敢藏諸〈『詩』〉・『書』・百家語者刑、唯博士官乃得有之」とあるが、本稿注（八）で指摘した通り、この「諸書百家語」の「諸」字は「詩」の誤りである。よって、この文は本稿第一節ですでに擧げた『史記』秦始皇本紀（あるいは『史記』李斯列傳）の文を燒き直したものと考えるべきである。つまり、後漢以降の文獻で「諸子を燒いた」とあるのは、全て最古層の史料の文章をほぼそのまま引用あるいは燒き直ししたものに過ぎず、これらを除けば後漢以降には「諸子を燒いた」と述べている文章は見えないのである。

しかし一方で、後漢以降になると「諸子は秦焚書の對象外だった」という說明が登場する。鍾肇鵬「焚書考」でも擧げている通り、[四]『論衡』書解篇に、

漢興、收五經、經書缺滅而不明、篇章棄散而不具。……秦雖無道、不燔諸子、……。

漢興り、五經を收め、經書缺け滅びて明らかならず、篇章棄散して具わらず。……秦は無道と雖も、諸子を燔かず、……。

とあり、『孟子』趙岐題辭に、

孟子既沒之後、大道遂絀、逮至亡秦、焚滅經術、坑戮儒生、孟子徒黨盡矣。其書號爲諸子、故篇籍得不泯絕。

孟子既に沒するの後、大道遂に絀(くつ)す、亡秦に至るに逮び、經術を焚滅し、儒生を坑戮して、孟子の徒黨盡く。其の書號して諸子と爲す、故に篇籍泯絶せざるを得たり。

とあり、『孔子家語』後序に、

始皇之世、李斯焚書、而『孔子家語』與諸子同列、故不見滅。

始皇の世、李斯書を焚く、而れども『孔子家語』は諸子と列を同じくす、故に滅ぼされず。

とあり、『文心雕龍』諸子篇に、

暨於暴秦烈火、勢炎崐岡。而煙燎之毒、不及諸子。

暴秦の烈火に暨り、勢炎崐岡のごとし。而れども煙燎の毒、諸子に及ばず。

とある。この他、唐初の文章ではあるが、『晉書』律曆志上篇に、

及秦始皇焚書蕩覆、典策缺亡、諸子璅言時有遺記。

秦始皇書を焚き蕩覆するに及び、典策缺亡するも、諸子の璅言は時に遺記有り。

とあり、『鬻子』逢行珪序に、

因據劉氏九流、卽道流也。遭秦暴亂、書記略盡。『鬻子』雖不預焚燒、編秩由此殘缺。

劉氏の九流に因據すれば、卽ち道流なり。秦の暴亂に遭い、書記略ぼ盡く。『鬻子』焚燒に預らずと雖も、編秩これに由り殘缺す。

とある。この他、「諸子」とは明確に述べていないものの、子部に分類される天文書も秦焚書を免れたとする記述があり、『後漢書』天文志上に、

秦燔『詩』『書』、以愚百姓、六經典籍殘爲灰炭、星官之書全而不毀。

秦『詩』『書』を燔き、以て百姓を愚にし、六經典籍は殘(そこな)いて灰炭と爲れども、星官の書は全くして毀(か)けず。

とあり、唐初の文章ではあるが『晉書』天文志に、

暴秦燔書、六經殘滅、天官星占存而不毀。

暴秦書を燔き、六經殘滅すれども、天官の星占存して毀(か)けず。

とある。これらの文章は、「諸子は燒かれた」とする最古層の史料の説と完全に矛盾する。上述したように、後漢以降にも見える「諸子は燒かれた」とする説は最古層の史料を引用・燒き直ししたものに過ぎないため、後漢以降ではこの「諸子は秦焚書の對象外だった」とする新説が主流な認識となっていたと言える。

そして、これら『論衡』書解篇以下の例は、いずれも諸子文獻の序文といった諸子を重視する文中に見える。つまり、「諸子は秦焚書の對象外だった」という新説は、諸子文獻の價値の高さを補強する目的から創作された説話と見るべきであり、史實と考えるべきではない。特に前漢末期以降には經書が秦焚書の被害を受けたと強調されるようになったため、後漢以降は『論衡』書解篇で明確に示されているように、諸子文獻の價値の高さを裏付けるために「諸子は燒かれなかった」という新説が登場してきたのであろう。そしてこのような新説による裏付けが、後漢から魏晉南北朝期にかけて諸子文獻が重視され、また『孔子家語』・『孔叢子』などの僞書が作られる根據・風潮となったのかもしれない。

おわりに

以上考察してきた通り、最古層の史料と比べると、秦焚書に對する解釋・説明は前漢末期から魏晉南北朝期ごろにかけて徐々に變化が生じていることがわかった。つまり、前漢末期頃から多くの書物に對し

て最古層の史料にはなかった「口傳で傳わった」や「焚書の對象外だった」などという説明が加えられるようになった。

『易』と秦焚書と關聯は最古層の史料には見えないが、『漢書』などが「『易』は占いの書物だから燒かれなかった」と説明し、『春秋』と秦焚書との關聯も最古層の史料にはないが、何休が「口傳で傳わった」と説明するようになる。

『詩』は、最古層の史料では「『詩』『書』を燒く」という表現が頻出するものの、『漢書』や『論衡』には「諷誦によって傳えられた」とか「『詩經』を解説する書は燒かれたが、經は燒かれなかった」などといった説明が登場する。これらの説明は最古層の史料と抵觸しないよう注意を拂っているように見える。

『書』・『禮』と秦焚書との關聯は、最古層の史料ですでに詳細に説明されており、後漢以降もそれをほぼ踏襲している。この點を見ても、最古層の史料に書かれた内容は足枷として一定の役割を果たしており、後漢以降もその認識から自由に離れられなかったことが伺える。

最古層の史料とそれ以降とで秦焚書觀に明確な違いが見られるのは『樂』と諸子である。最古層の史料では、「樂」（あるいは『樂』）は秦焚書とは無關係に滅んだと考えていた。しかし、應劭『風俗通義』では「樂」は秦焚書によって滅んだと説明し、この考えは魏晉以降にはほぼ定着した。

諸子は、最古層の史料では秦焚書の對象であったと明言されている。しかし、『論衡』書解篇には「諸子は燒かれなかった」ということれとは全く逆の新説が現れ、以後はこの説が廣く受け入れられた。

今文『孝經』と秦焚書との關聯は、唐初の『隋書』經籍志などに初めて見え、それ以前の文獻には見られない。

古文『孝經』と秦焚書との關聯は『孔子家語』後序のみに見え、子襄が秦焚書を避けるために孔家の壁中に隠したとしているが、この話は王肅の創作と見るべきであろう。

このように、秦焚書觀は前漢末期ごろから魏晉南北朝期にかけて徐々に變化していった。筆者は、このような變化の背景には古文經典の出現と儒教國教化があると推測する。今文に對する古文の史料的優位性は、秦の焚書を經ていない點にある。この古文の出現により、各文獻が秦焚書をどのように經て今に傳わったのかを説明しなければならないという意識が強まったのだろう。

また、『樂』・『孝經』・諸子といった五經以外の文獻と焚書との關聯説明は、儒教が國教化する前漢最末期から後漢初期頃ではまだ急務な問題ではなかったのだろう。だからこそ、これらの説明は五經に比べて若干後になって初めて現れるのではないだろうか（秦焚書との關係が初めて見えるのは、『樂』は『風俗通義』聲音篇、今文『孝經』は『隋書』經籍志、古文『孝經』は『孔子家語』後序、諸子は『論衡』書解篇、天文書は『後漢書』天文志上）。

從來、秦焚書に言及する場合、ほとんどの研究者は以上に考察してきたような秦焚書觀に變遷があることに注目せず、主な爭點は秦焚書の實態や事實にあった。そして近年、この秦焚書の歴史的事實に關する議論は、古代出土文獻の增加や、疑古・信古・釋古論爭とも相俟って、重要なテーマとなっている。

もちろん、歴史的實態の追求は重要なことであるが、本稿では秦焚書の實態に對する探求を思い切って放棄することにした。そして本稿は歴史學的な問題を思想史的な問題へ變換し、問題の立て方を「秦焚

書を各時代がどのように見たのか」として考察を進めてきた。そして、このような視點から見ると、秦焚書に關する前漢末期より前と後の史料はもはや同列に扱うわけにはいかないのではないだろうか。

では最後に、秦焚書觀に變遷があるという着眼點がどのような新しい發見をもたらすのか一つの例を擧げて結語としたい。

一九九三年に發見された郭店楚簡と一九九四年に發見された上博楚簡には『緇衣』という文獻があり、これらはいずれも『禮記』緇衣篇と比較できる內容である。[一五] これらの楚簡本『緇衣』の發見により、『子思子』という佚書が注目されるようになった。『子思子』については、本稿でも一部擧げた通り、『隋書』音樂志上所引の梁の沈約が以下のように述べている。

竊以秦代滅學、『樂經』殘亡。……案漢初典章滅絕、諸儒捃拾溝渠牆壁之閒、得片簡遺文、與禮事相關者、卽編次以爲禮、皆非聖人之言。『月令』取『呂氏春秋』、『中庸』・『表記』・『防（坊）記』・『緇衣』皆取『子思子』、『樂記』取『公孫尼子』、『檀弓』殘雜、又非方幅典誥之書也。……。

竊に以（おも）うに秦代學を滅ぼして、『樂經』殘亡す。……案ずるに漢初典章滅絕し、諸儒は溝渠牆壁の閒に捃拾し、片簡遺文を得、禮事と相い關するものは、卽ち編次して以て禮と爲すも、皆聖人の言にあらず。『月令』は『呂氏春秋』より取り、『中庸』・『表記』・『防（坊）記』・『緇衣』は皆『子思子』より取り、『樂記』は『公孫尼子』より取り、『檀弓』は殘雜たり、また方幅典誥の書にあらざるなり。……。

このように、焚書の害を受けたために『禮記』の中庸・表記・坊記・緇衣の四篇は『子思子』から取ったとしている。楚簡本『緇衣』の發見後、多くの研究者はこの沈約の說を根據にして、楚簡本『緇衣』を子思學派や思孟學派の文獻であるとした。

筆者はかつて拙稿「「子思子」と「禮記」四篇の關係―楚簡本「緇衣」を出發點として―」で、傳世文獻所引『子思子』（七卷本『子思子』）を全て輯佚し、また傳世文獻所引『子思子』・『禮記』緇衣篇・楚簡本『緇衣』の比較を行った。そして、七卷本『子思子』は六朝後期の文獻に初めて引用され、また楚簡本『緇衣』の發見は七卷本『子思子』が『禮記』緇衣篇より先行するテキストであることを證明する材料になっていないことから、七卷本『子思子』は『禮記』四篇や『淮南子』繆稱篇などから取って作られた僞書であり、子思學派や思孟學派などの文獻ではないと主張した。[一六]

ではここで改めて「秦焚書觀の變遷」という視點から沈約の說を見てみると、沈約は後漢以降の秦焚書觀に立脚していることがわかるだろう。沈約は、秦の焚書によって『樂經』が滅ぼされ、また焚書を免れた諸子文獻の『呂氏春秋』・『子思子』・『公孫尼子』によって『禮』の一部が復元されたと認識しているのである。

よってこの點からも、前漢末期以降に初めて現れる新しい秦焚書觀に立脚した沈約の說を根據に、「『緇衣』は『子思子』から取った」か「『緇衣』は子思學派の文獻である」と主張するのは輕率であると筆者は考えている。

注

（一）一部を例に擧げると、康有爲「秦焚六經未嘗亡缺考」（『新學僞經考』）、劉師培「六經殘於秦火考」（『左盦集』第三卷）、鍾肇鵬「焚書考」（『求是齋叢稿』上卷、巴蜀書社、二〇〇一年八月）、李銳「秦焚書考」

（『人文雜志』二〇一〇年第五期）などがある。

（二）「焚文書」は、『史記』秦始皇本紀所引賈誼言は「禁文書」に作る。

（三）この他にも後漢以降の文獻には「詩書を燒く」という表現が見えるが、そのほとんどは『史記』の文章をほぼそのまま燒き直ししたものである。『漢書』郊祀志上の「始皇封禪之後十二年而秦亡。諸儒生疾秦焚『詩』『書』、誅滅文學、百姓怨其法、……」は『史記』封禪書にほぼ同文が見られ、『漢書』蒯伍江息夫傳の「往者秦爲無道、殘賊天下、殺術士、燔『詩』『書』、滅聖迹、棄禮義、……」は『史記』淮南衡山列傳にほぼ同文が見られ、『漢書』司馬遷傳の「周道既廢、秦撥去古文、焚滅『詩』『書』、……」は『史記』太史公自序にほぼ同文が見られ、『漢書』儒林傳の「及至秦始皇兼天下、燔『詩』『書』、殺術士、六學從此缺矣。……」は『史記』儒林列傳にほぼ同文が見られる。

（四）本稿では、錯字を改めた文字は「〈　〉」に入れて示す。

（五）例を擧げると、『漢書』儒林傳の顏師古注所引衞宏『詔定古文官書序』に「秦既焚書、……」とあり、『漢書』異姓諸侯王表に「秦既稱帝、……箝語燒書、……」とあり、『漢書』地理志下に「昭王曾孫政幷六國、……燔書阬儒、……」とあり、『漢書』楚元王傳に「及秦焚書、各別去」とあり、『後漢書』陳王列傳に「……與秦焚書阬儒、何以爲異。」とあるなど、枚擧に暇がない。

（六）福井重雅氏は、後漢以降の文獻になって初めて「五經」という言葉が現れることを指摘している。福井重雅『漢代儒教の史的研究』（第一章第一篇、汲古書院、二〇〇五年三月）を參照。

（七）この『孔子家語』後序の文章では『論語』も秦焚書を避けたことになっているが、秦焚書と『論語』の關係はこの文章以外には見えないため、以下は特に言及しない。

（八）「諸書百家語」の「諸」字は「詩」の誤りとすべきである。張宗祥『論衡校注』（上海古籍出版社、二〇一〇年三月）、劉盼遂『論衡集解』（中華書局、一九五七年七月）、黃暉『論衡集解』（新編諸子集成、中華書局、一九九〇年二月）などを參照。

（九）本稿では、推測した缺字を「〔　〕」に入れて示す。

（一〇）孫詒讓『札迻』は、「案、「餘禮」無義、「禮」、疑「札」之誤。「札」誤爲「礼」、轉寫作「禮」、遂不可通。」と指摘している。

（一一）秦焚書によって禮と樂が崩壞したとする表現はすでに『漢書』にも見え、楊胡朱梅云傳に、「秦爲亡道、削仲尼之迹、滅周公之軌、壞井田、除五等、禮廢樂崩、王道不通、故欲行王道者莫能致其功也」とある。また、『後漢書』祭祀志上に、「秦相李斯燔『詩』『書』、樂崩禮壞」とある。しかし、「樂」を對象にして書かれた文章ではないので、ここではこれらの例を除くこととする。

（一二）『隋書』經籍志・史部に、「『漢書集解音義』二十四卷（應劭撰）」とある。

（一三）『漢書』藝文志六藝略『春秋』類に、

……丘明恐弟子各安其意以失其眞、故論本事而作傳、明夫子不以空言說經也。『春秋』所貶損大人當世君臣、有威權勢力、其事實皆形於傳、是以隱其書而不宣、所以免時難也。及末世口說流行、故有公羊・穀梁・鄒・夾之傳。

……丘明　弟子各（おのおの）其の意に安んじ以て其の眞を失わんことを恐れ、故に本事を論じて傳を作り、夫子の空言を以て經を說かざることを明らかにするなり。『春秋』貶損する所の大人は當世の君臣にして、威權勢力有り、其の事實は皆傳に形（あらわ）る、是を以て其の書を隱して宣べず、時難を免るる所以なり。末世に及び口說流行す、故に公羊・穀梁・鄒・夾の傳有り。

とあり、『左傳』が「時難」を免れたとしている。野間文史『春秋學』

（研文出版、二〇〇一年九月、六一―六二頁）はこの「時難」を「（秦の焚書のような）時局の災難」と補って譯している。しかし前後の文脈から見て、この「時難」は必ずしも秦の焚書を指すとは言い切れない。假にこの「時難」が秦焚書を指すとしても本稿の論旨に大きな影響を與えないが、ここではこの『漢書』藝文志『春秋』類の文例は除外することにする。

（一四）鍾肇鵬『焚書考』（『求是齋叢稿』上册、巴蜀書社、二〇〇一年八月）。

（一五）荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年五月）、馬承源主編『上海博物館戰國楚竹書（一）』（上海古籍出版社、二〇〇一年十一月）を參照。

（一六）拙稿「「子思子」と「禮記」四篇の關係―楚簡本「緇衣」を出發點として―」（『出土文獻と秦楚文化』第五號、上海博楚簡研究會編、日本女子大學文學部、二〇一〇年三月）。